

山上憶良と「子」

——挽歌「男子名は古日に恋ふる歌」の一考察——

李 暁 梅

はじめに

山上憶良（六六〇～七三三？）は中国で言うところの初唐から盛唐にかけて活躍した万葉歌人の一人である。漢文学の学殖が深く、遣唐使の経歴がある。七十四年の生涯の中で、まだ定かでない作品を除けば、全七十八首（長歌十一首・短歌六十六首・旋頭歌一首）が残されている。万葉歌人としては多作である。中西進氏が指摘されたように、彼は百済国の滅亡による朝鮮からの渡来人であろうか、その作風も内容も『万葉集』では異彩を放っている。老苦・病苦・夭逝・家族・貧窮など人生的、社会的な問題を真正面から取り上げ、「世の中の道」の険しさ・人間苦の諸相を率直に叙述している。

憶良の作品の中には「子ども」に直接触れた歌が多く出

ている。数えてみれば、

「山上憶良臣、宴を罷る歌一首」（三・三三七）

「感情を反さしむる歌一首并せて序」（五・八〇〇、八〇

二）

「子等を思ふ歌一首并せて序」（五・八〇二、八〇三）

「老身に病を重ね、経年辛苦し、さらに児等を思ふ歌七首 長一首 短六首」（五・八九七、八九九、九〇〇）

「男子名は古日に恋ふる歌三首 長一首 短二首」（五・九〇四）

など、十首ほどが挙げられる。

このように、直接かつ集中的に「子」（または「児」）を取り上げるのは、防人の歌（二十・四四〇²）を除けば、

極めて稀なことである。それに、主題は憶良独自であり特徴的である。憶良の「子」に関する連作のそれぞれは「惑・愛・無常」というキーワードで提示される。この論文は老人が幼児の「夭逝」を悲しむ「男子名は古日に恋ふる歌」三首 長一首 短二首（以下は「古日歌」と称す）を中心に考えたい。

すると、憶良はなぜ「古日歌」を創作しようとしたのか。この問題を考える際に、従来その成立が必ず議論の焦点としてされてきたようである。例えば、窪田氏は文章の書き方から憶良の若い頃の作かと言っている。その一方、伊藤博氏は署名がないことと、漢詩文を離れて和歌だけで成るとの二点から、彼の帰京後の作と認められると言っている。加えて、大伴熊凝の歌（八八六―八九一）の条で触れているように、憶良が過去において幼な子を失った経験があるのであることや、幼児を失った知人に成り切って、知人への慰問の作であろうなども、「古日歌」の創作背景としてよく言及されている。

本論文は文芸作品としての「古日歌」について論じてみたい。即ち、憶良が自らの文藝活動の中で、どうして人間苦の一つ「老年喪子」のテーマを取り上げようとしたのか。その創作の源泉、またはモチーフは何だったのか。六朝志

怪小説や唐詩文など中国漢詩文を調べて、その解明を試みたい。それでは、まず該当作品の特徴について考える。

一、起承転結の文章構成

「古日歌」は長歌と二首の反歌の二つの部分からなっている。長歌は生前の「古日」の成長及び病にかかるから死に至るまでの様子を描いており、二首の反歌は冥界における我が子の無事を願う親の気持ちを詠んでいる。「古日」生前の様子を描く長歌の部分は「起承転結」の順序で構成されている。まず、長歌のほうを引用する。

世の人の 貴び願ふ 七種の 宝も我れは 何せむに
《起》

我が中の 生れ出でたる 白玉の 我が子古日は 明星の 明くる朝は 敷櫓の 床の迎去らず 立てれども 居れども ともに戯れ 夕星の 夕になれば「いざ寝よ」と 手をたづさはり 「父母も うへはなさがり さきくさの 中にを寝む」と 愛しくしが語らへば いつしかも 人と成り出でて 悪しけくも良けくも見むと 大船の 思ひ頼むに《承》
思はぬに 横しま風の にふふかに 覆ひ来れば 為

むすべの たどきを知らに 白栲の たすきを懸け
まそ鏡 手に取り持ちて 天つ神 仰ぎ祈ひ禱^のみ 国
つ神 伏して額^{ぬか}つき かからずも かかりも 神のま
にまにと 立ちあがり 我れ祈ひ禱めど しましくも
良けくはなしに やくやくに かたちくづほり 朝な
朝な 言ふことやみ たまきはる 命絶えぬれ「転」
立ち躍^もり 足すり叫び 伏し仰ぎ 胸打ち嘆き 手に
持てる 我が子飛ばしつ 世間の道「結」³

周知のように、「起承転結」は漢詩、特に絶句の四連構成法であり、また、文章の構成や物事の順序でもある。例えば、絶句の場合、起句でうたい起こし、承句でこれを承け、転句で趣を転じ、結句で結ぶ。右の「古日歌」は、初めから「何せむに」までは「起」で、親の「わたし」ととって「子」は何よりの宝物だ、というこの歌の趣旨を提示している。「承」は「大船の思ひ頼むに」までで、提起された趣旨を承けて、我が子「古日」の日常生活でのかわいい仕草や愛嬌を連想させており、「わたし」の「古日」の成長への期待を叙している。

そして、文章の主題にかかわる「転」の部分は、逆接の意味を表す「思はぬに」一句によって展開されている。突

然、古日は病にかかり、思いもしなかった実態に陥っている。心を尽くして我が子を助けようとする親の懸命な祈禱と絶望、「古日」の日に日に衰弱していく様子を描いている。最後の「結」は「立ち躍り」から末尾までだが、我が子の死を歎き悲しむ親の姿を描き、「世の中の道」の一句で常無く世の中を詠嘆しながら全篇を締め括っている。

このうち、「承」と「転」がウエートのある部分であり、合わせて五十四句で、二十七句ずつに均分されている。

「承」の部分では、「昼」と「夜」を対比する手法によって、実体験風で古日の動きや言葉の一つ一つリアルに描いており、親の愛を通して「古日」の明るいつい日々をこまごまと叙述している。それに対して、「転」の部分では雰囲気が一変する。「たすきを懸け」「まそ鏡手に取り持ちて」「伏して額つき」「立ちあがり」など一連の動詞を並べており、親の天地の神々に切に祈禱するその動きが具象的に再現され、親の苦悶と悲歎がしみじみと表される。

このような整然とした文章構成は「古日歌」のみであって、憶良のほかの「子」の歌からは見ることができない。例えば、あの有名な「子等」を思ふ歌一首并せて序^も、「子は何よりの宝物である」という子に対する愛情を詠んでいる作品であるが、その詠み方がまったく異なっている。

子等を思ふ歌一首并せて序

釈迦如来、金口に正に説きたまはく、「等しく衆生を思ふこと羅睺羅のごとし」と。また説きたまはく、「愛は子に過ぎたることなし」と。

至極の大聖すらに、なほし子を愛したまふ心あり。

いはむや、世間の蒼生、誰れか子を愛せずあらめや。
瓜食めば 子ども思ほゆ 栗食めば まして偲はゆ
いづくより 来りしものぞ まなかひに もとなかかりて 安寐し寝さぬ (五・八〇二)

反歌

銀も金も玉も何せむにまされる宝子にしかめやも
(五・八〇三)

序文は、仏典の神格化された釈迦如来の御言葉を引用し、衆生を思ふお釈迦様でさえ自らの子を愛しているのに、ましてわれわれ平凡な世俗の人間は子どもを宝物のように愛するのが当たり前であることだと説くのである。結びである反歌は、比喩的な言い方で再び「子ほどよいものはない」という趣旨が強調され、その間、九句からなっている長歌の八〇二番はこの一群の主体として、世俗社会における親と子の宿縁関係を詠む。子どもの好物「瓜」と「栗」を挙

げて、その一挙手一投足、可愛いしぐさがまるで親の脳裏に焼きついているようで、親の意識から一時も離れることはない。宿縁として生まれてきた子どもに對する親の深い愛情には切々たるものがある。したがって、「子等を思ふ歌」は一般論としての親と子の切っても切れない固い絆を、仏のお言葉や作者の体験などを踏まえて度を重ねて強く主張しているのである。

しかし、比べてみて「古日歌」はどちらかというと、幼な子を夭逝した老夫婦の痛切な嘆き悲しみ、「老年喪子」という人間苦を語っている。なぜなら、まず、「古日」という名のつけ方からそれが伺えるからである。ここで、中西進氏のご指摘に注目してみると、平安時代では「一日」は一般的に女子の名であった⁽⁴⁾。女の子の名につけると、長生きができるという俗信があったようだ。しかし、「日」は太陽だが「靈」に通ずるといふ言い方もある。したがって太古、「古日」は親が男の子の長寿を願うての命名であろう。

それから、伊藤博氏が指摘されているように、「我が中の生れ出でたる」は「われら夫婦の間の、それこそ願いに願って、やつと生まれてきてくれた、白玉のようなかわいい我が子「古日」は、という意味になろう⁽⁵⁾」と思われる。さらに「悪しけくも良けくも見む」は、良きにつけ悪しき

につけて子の成長を末長く見届けてやりたい、という尋常でない親の気持ちが表されている。それに合わせて考えると、「明星の」から「しが語らへば」に至る十七句が、「古日」が両親の間に遅く授かった一人子であったことを匂わすことになる。

このように、「古日歌」は確かに事実を透視する作家の目が自らにしからしめたものであり、しかも整然とした「起承転結」の文章構成であるからこそ、作者の創作趣旨がより具体性のあるまとまった内容を周到に読者に呈することが可能になったと思われる。

二、表現上の独自性

「古日歌」における表現上の特徴について、まず挙げられるのは「身体的言葉」が多用されていることである。親子の明るい情愛の日々、子の病から死に到る闘病と治病祈願、さらに亡児を悼む親の悲哀。それぞれの場面には身体の動きを表す言葉が連続して出ていて、視覚的な表現効果もあり、躍動感もある。

例えば、「承」の部分では、子についての叙述であるが、朝は「立てれども居れども」という行為を表す身体的言葉を用いて、活発に動き回る子の姿を描き出している。親と

一緒に遊ぶ行為を「ともに戯れ」と表しており、夕方寝る前の子の可愛い仕草について「手をたづさはり」「しが語らへば」で表している。親子の情愛がまるで読者の目の前に再現されているように具象的に表されている。

「転」の部分では、「まぞ鏡 手に取り持ちて」「伏して額つき」「立ちあがり」という行為を表す身体表現を用いて、親の懸命な平癒祈願を表している。そして、病む子の描写については「かたちくつほり」も「言ふことやみ」もリアルな身体表現であって、容態が弱まっている様子が表される。

そして、子を失った親の悲哀を描く「結」の部分では、「立ち躍り 足すり叫び 伏し仰ぎ 胸打ち歎き 手に持てる」の一連の動作が描写されている。躍り上がり、地団駄踏んで泣き叫び、伏したり仰いだりして胸を叩いて歎く。「泣く」や「悲し」で表し得ぬ、激しく生々しい痛みがそこに表現されている。

もう一点、「孤語の使用」も「古日歌」の表現上の一特徴である。

山上憶良の作品には孤語という語彙の蒐集が可能である、と高木市之助氏が指摘された⁽⁶⁾如く、「孤語」の使用は「古日歌」のみならず、憶良の創作上の一特徴である。あの有名

な「貧窮問答の歌一首并せて短歌」(五・八九二〜八九三)には二十以上の孤語を盛り込んでいる。「古日歌」には主に「横しま風」「にふふか」「立ちあざり」「かたちくつほり」の四語が挙げられる。しかも、みな「転」の部分に集中している。

「横しま風」は文字通り、横から吹き付ける突風のことを意味する。窪田氏の解釈では「横風は航海者の最も怖れる横浪を立てる横風と思われる。それだと、「大船の思ひ頼むに」に繋がりを持ったものとなる」という。⁽⁷⁾「にふふか」は古来、難訓とされていて、「俄かに」の意かと言われている。ここでは、「横風がしきりに古日の上に覆いかぶさってきた」の意と解されている。⁽⁸⁾「(立ち)あざり」は「足去り」⁽⁹⁾か、または「乱れる」意かと言われている。体をしきりに動かす様子を表しているようである。「(かたち)くつほり」は、『代匠記』(初)に「やせすほる心ときこゆ」とある。しほんで勢いがなくなる意の四段動詞らしい。ここでは「古日」が日に日に崩れていることを意味しているであろう。したがって、「古日歌」は孤語を使用することによって、まったく予想もしなかった急変事態の深刻さとそれに対する親の悲歎をなまなましく現すことができていると思われる。

加えて、「たまきはる」「すべ:(ない)」「世の中の道」という三つの表現についても注目したい。

「たまきはる」は「魂きはる」とも表記する。魂のきわまる意で「命」「うち」「世」などにかかる枕詞である。「古日歌」のみならず、憶良の八〇四番「世間の住みかたきことを哀しぶる歌并せて序」と八九七番「老身に病を重ね、経年辛苦し、児等を思ふに及る七首」にも使用されている。「古日歌」では子どもが息が絶えてしまうことを「たまきはる命絶えぬれ」と述べている。ほかの二首には次のように出ている。

老よし男は かくのみならし たまきはる 命惜しけ
ど 為むすべもなし (五・八〇四)
たまきはる うちの限りは 平らけく 安くもあらむ
を 事もなく 喪なくもあらむを (後略) (五・八九七)

八〇四番は老の苦しみのゆえに、命は惜しく常住不変を願うが仕方が無いという厳しい現実を詠んでいる。八九七番では文頭にあるこの一句には「命」という文字があとについでいないが、同じく永遠の命のない現実に伴う老身に

病を重ねる人間苦とその煩惱が主題である。

次の「すべ：(ない)」は憶良の作品によく出てくる。どうすることもできない力の限界を感じると共に、手段や方法がないことを意味する。次に挙げるように、大伴旅人に奉げた七九四番「日本挽歌」とその反歌七九六番、八〇四番「世間の住みかたきことを哀しむる歌并せて序」、八九二番「貧窮問答歌一首并せ短歌」、「老身に病を重ね、経年辛苦し、児等を思ふに及る七首」の反歌八九九番と九〇一番に出ている。

心ゆも 思はぬ間に うち靡き 臥やしぬれ 言はむ
すべ 為むすべ知らに (五・七九四)

はしきよしかくのみからにしたひ来し妹が心のすべも
すべなさ (五・七九六)

世間の すべなきものは 年月は 流るるごとし と
り続き (中略) 老よし男は かくのみならし たまき
はる 命惜しけど 為むすべもなし (五・八〇四)

かくばかり すべなきものか 世間の道 (五・八九二)
すべもなく苦しくあれば出で走り去ななと思へどこら
に障りぬ (五・八九九)

荒栲^{あらたへ}の布衣をだに着せてにかくや嘆かむ^せ為むすべを

なみ (五・九〇一)

「日本挽歌」では異郷で妻に死なれてしまった大伴旅人の茫然自失、なすすべのないことを歌っている。その反歌七九六番では、無理やり筑紫についてきた妻の心が苦しかったことを表している。八〇四番は前述したように、老人が常住できないこの世の無常を詠嘆している。八九二番は「貧窮問答歌」の結びであるが、疑問文でどうしても貧窮から脱出できない現実を力強く問いかけている。八九九番はどこかへ逃げ出したいほど辛い現実に対する仕方の無さを歌っている。その九〇一番は自分の子に布すら着せられない庶民の一人の苦悩を表している。

さらに「世の中の道」一句は八九二番「貧窮問答歌」にも出ている。同様に結尾の一文で全篇を締め括っている。世間を渡るのに人間の苦しみを詠嘆する作者の気持ちが表示されている一面があると同時に、人間苦の諸相をより普遍的なものとして取り上げようとする作者の創作姿勢も表されている。

このように、「古日歌」では身体表現を用いて、親子のおおらかな情愛の日々、子の病から死に到る闘病と親の治療祈願、さらに亡児を悼む親の悲哀が、まるで目の前に再現

されているようにリアルに描かれている。その中で、新しく創った言葉が盛り込まれ、病状の急変や親の悲哀がより的確に表現されている。とともに、憶良の他の作品に通じる表現も出ている。よって、「人間苦」という文藝活動における憶良が追及している創作テーマは一貫したものになったのである。

三、冥界への発展

前述したように、「古日」が生きている様子を描く長歌に對して、二首の反歌は死後の世界について言及している。

若ければ道行き知らじ賄はせむ黄泉の使ひ負ひて通らせ（五・九〇五）
布施置きて我れは祈ひ禱むあざむかず直に率行きて天道知らしめ（五・九〇六）

九〇五番は、まだまだ幼い子どもであることに焦点を当てている。吾が子はまだ幼いため、道も知らないのであるから、黄泉の使いよ、どうか背負って案内してくださいと詠んでいる。次の九〇六番は、とにかく無事に天の国に着くようにと強調している。作者が我が子を黄泉の国へ送る

心境に立ち至って、できるだけのお礼を贈るから、まっすぐに天道を通らせて、天の国に入らせるように祈願している歌である。幼い一人子の冥途への旅を氣遣う、親の切々たる思いが溢れている。

この二首の反歌は長歌の結尾「手に持てる 我が子飛ばしつ 世の中の道」の一文に続いている。死者の靈魂が鳥に化して空を飛翔する。この発想は憶良の次の二首の歌にも見られる。

山上臣憶良が追和歌一首
天翔りあり通ひつつ見らめども人こそ知らね松は知らむ（二・一四五）
慰むる心はなしに雲隠り鳴き行く鳥の音のみし泣かゆ（五・八九八）

しかし、右記の二首は人間が死んで魂が鳥となって遠くかなたへ飛んでいくという話に留まっていて、その行き先「冥途」に関する言及はなかった。したがって、憶良の作品における「冥途への発展」は「古日歌」のみである。要するに、子どもは現世においても他界においても死んではいないことを信じていたわけである。この点について、憶良

が影響を受けている漢魏六朝文学、特に六朝志怪小説などを辿れば、その発想の源を確かめることができる。

例えば、一番古く伝えられている志怪書・魏の初代皇帝・曹丕（一八七～二二六）が著した『列異伝』には、魏の武將・蔣濟（？～二四九）に関する「冥府の息子」という異聞がある。

蔣濟が領軍將軍をつとめていた頃、その妻の夢に死んだ息子が現れて、涙を流しながらこう言った。「死者と生者とでは世界の違うものでして、私は生きていた間こそ公卿の子でしたが、いま冥土では、泰山の役所の子使にされ、こき使われて瘦せ衰えました。口では言い切れない辛さです。いま太廟の西孫阿という人がおりますが、この人はいずれ泰山の知事として召し出されることになっていますので、母上から父上にお話し頂き、阿に頼んで私を楽な役目へ転任させるようにと仰ってくださいませんか」と言い終わると、母ははっと目が覚めた。（中略）そこで濟が部下を太廟のわきまでやり、孫阿を尋ねさせたところ、果たして見付かった。人相は夢の中の説明のとおりであつた。濟は涙を流しながら、「息子の頼みを裏切るところであつたぞ」と言って孫阿に会い、夢の話を物語った。（中略）それから一月あまり経った後、母親の夢に

また息子が現れて、こう報告した。「もう転任させてもらつて、録事になっております。」⁽¹¹⁾

蔣濟の息子が死んだ後、妻の夢に現れて、転職の願いを話したが、夢の話とおりにしたら、本当に冥途での転職ができた物語である。

もう一つ、陶潜が著した『搜神後記』には「死児の迎え」というやや似ている話もある。

宋のころのこと、一人の書生が遠方へ勉強に出かけていた。ある夜、留守宅の両親が、火をともして夜なべをしていると、ひょっこり息子が現れ、そばに寄ってきてためいきをつきながら言った。「この私は魂だけなのです。もはや生ある人間ではありません」両親がわけを尋ねると、「今月に入ってから病氣にかかり、本日これこれの時刻にあい果てました。ただ今は瑯邪（山東省）の任子成さんの家におりますが、明日納棺する手はずになっているので、父上と母上をお迎えに上がつたのです」と語るのだった。親たちが（中略）その家のあるじに挨拶をし、息子の亡骸を前にして悲歎の涙にぐれながら、息子の病氣について尋ねると、その間の事情は息子に聞いた通りであつた。⁽¹²⁾

時代をさがって唐代に移ると、段成式（八〇三？～八六三）が著した異聞雜記集『西陽雜俎』には、詩人顧況（七二七～八一五）に関する逸話が記録されている。

顧況は一子を失った。歳は十七であつた。子どもの魂は、遊行し、夢のように恍惚として、家から離れなかつた。顧況はしきりに歎き悲しみ、そこで詩を作つて吟じ、さらに慟哭した。「老人が息子を亡くして、暮れ方、血涙を流している。悲鳴をあげる猿のごと心は驚き、飛びゆく鳥のように跡かたもない。七十歳になつた身だ、いつまでも別れてはいない。」その子はこれを聴いて深く悲しみ、自ら誓いを立てた。ただ今すぐ人の身になるのなら、再び顧家の子になろうとの話である。（後略）⁽¹³⁾

漢魏六朝時代の志怪小説では人間が死んでいても、魂が現世と冥土の間を行き来することが出来る発想があつた。子供の夭逝を嘆き悲しむ親の気持ちを表すものであるが、とりわけ「老年喪子」のテーマ、愛する子の靈魂が鳥に化して痕跡を空中に残さず消え去ってしまう発想が、遣唐使の経歴のある、漢文学の学殖深い憶良の文藝創作の源泉の底流にあることが伺われる。

四、漢魏六朝唐時代の漢詩文における「子」の登場

中国古典文学における「子」の登場は漢詩のほか、哀辞、碑文、賦などにも出ている。漢魏六朝時代の詩においては、孔融（一五三～二〇八）の「雜詩二首」、潘岳（二四七～三〇〇）の「思子詩」と陶淵明（三六五～四二七）の「責子」の三首がある。前の二首は幼児の死を悼む詩であつて、後の陶淵明の詩は老父が学問をしない五人の子どもを叱るものである。

そして、唐詩においては三大詩人李白、杜甫、白居易にそれぞれ「子」を詠んだものがある。時代の繁栄が背景になり、哀傷詩の一角に確かな位置を占めてきたためもあつて、幼児の死を悼む詩も多く詠まれている。王勃（六四八～六七六）、顧況（七二七～八一五）、于鵠（七四七？～？）、孟郊（七五一～八一四）、元稹（七七九～八三二）、白居易（七七二～八四六）らの作品が残されている。

その一方、漢文になると、蔡邕（一三二～一九二）が七歳の幼児のために撰した「童幼胡根の碑銘」、曹植（一九二～二三二）が長女と次女のために書いた「金瓠哀辞」「行女哀辞」、曹丕が次男のために記した「仲雍哀辞」、江淹

（四四四～五〇五）の「傷愛子賦」、高く評価されている藩岳（二四七～三〇〇）の「金鹿哀辞」「為任子咸妻作孤女沢蘭哀辞」などが挙げられる。¹⁴

さて、三の部分で引用した唐代詩人・顧況の逸話には傍線で引いた部分であるが、詩人の「傷子」（『文苑英華』卷三〇三、『全唐詩』卷二六四）詩が出てくる。それを先に見よう。

老人喪一子。

老人が息子を亡くして、

日暮泣成血。

暮れ方、血涙を流している。

心逐斷猿驚。

悲鳴をあげる猿のごと心は驚き、

跡隨飛鳥滅。

飛びゆく鳥のように跡かたもない。

老人年七十。

七十歳になった身だ、

不作多時別。

いつまでも別れてはいない。

同じく「老年喪子」のテーマであるし、子どもの魂が「鳥」と化して跡形もなく飛び去ってゆく発想も出ているのである。そして、幼い一人子の冥途への旅を気遣う、親の切々たる思いと心配に関する内容は、元稹（七七九～八三一）の「哭子十首」（その二）に出ている。

纔能弁別東西位。 纔かに能く東西の位を弁別するも、未解分明管帶身。 未だ解く分明には身を管帯せず。 自食自眠猶未得。 自ら食らい自ら眠ること猶お未だ得ず、

九重泉路託何人。 九重の泉路 何人にか託せん。

衣食住にまったく分からない幼児なので、天の道へ無事に行けるのであろうか。誰かに頼んで案内してもらいたい。この詠み方は「古日歌」の反歌「若ければ 道行き知らず 賄ひはせむ 黄泉の使ひ 負ひて通らせ（五・九〇五）」に通じている。

漢魏六朝時代を遡ると、早くも幼児の死を悼む建安詩人・孔融（一五三～二〇八）の「雜詩二首」（その二）（『古文苑』卷八）には、死後の子どもの魂に触れる詩句があった。

（前略）

白骨歸黃泉、肌体乘塵飛。

白骨は黄泉に帰り、肌体は塵に乗りて飛ぶ。

生時不識父、死後知我誰。

生まれし時は父を識らず、死して後には私の誰なる

かを知らず。

孤魂遊窮暮、飄飄安所依。

孤魂は窮暮に遊び、飄飄として安くんぞ依る所あらん。

人生図嗣息、爾死我念追。

人生 嗣息を図るに、爾死して我追わんことを念う。

(後略)

子どもの姿が塵に乗って飛び去ったが、その魂が冥土の世界に入っている。しかし、一人の我が子があちこち彷徨い、ちゃんとした安らぎの場所があるうか。冥途へ旅する子どもへの親の思いを詠んでいる。

つまり、幼児の死を悼む漢詩の場合は、ほとんど死後の悲歎を中心に詠んでいる。子どもの生前の日々、またはその個性に関する描写は全く見られない。すると、哀辞、碑文、賦などの漢文のほうはどうであろうか。子どもの生前と死後の状況を対照的に描き、哀辞として高く評価されている藩岳の「為任子咸妻作孤女沢蘭哀辞」(『芸文類聚』卷三十四)を引いてみよう。

茫茫造化、爰啓英淑。猗猗沢蘭、応靈誕育。鬢髮蛾眉、巧

笑美目。顔耀榮苕、華茂時菊。如金之精、如蘭之馥。淑質彌暢、聰惠日新。朝夕顧復、夙夜尽勤。彼蒼者天、哀此矜人。胡寧不惠、忍予眇身。俾爾嬰孺、微命弗振。俯覽衾綖、仰訴穹旻。弱子在懷、既生不遂。存靡託躬、沒無遺類。耳存遺響、目想余顏。寢席伏枕、摧心剖肝。相彼鳥矣、和鳴嚶嚶。矧伊蘭子、音影冥冥。彷徨丘壟、徙倚墳塋。

茫茫たり造化、爰に英淑を啓く。猗猗たる沢蘭、靈に應じて誕育せらる。鬢髮と蛾眉と、巧笑と美目と。顔は榮苕のごと耀き、華は時菊のごと茂し。金の精の如く、蘭の馥の如し。淑質は弥いよ暢び、聰惠は日に新たなり。朝夕顧復し、夙夜尽く勤む。彼の蒼き者は天、此の矜人を哀れむ、という。胡寧ぞ恵れまらずして、予が眇身に忍き。爾嬰孺をして、微命振わざらしむ。俯しては衾綖を覽、仰いでは穹旻に訴う。弱子は懷に在りて、既生は遂げず。存しては躬を託する靡く、没しては遺類無し。耳には遺響を存し、目には余顔を想う。席に寝ね枕に伏せば、心を摧き肝を剖く。彼の鳥を相れば、和鳴嚶嚶たり。矧んや伊の蘭子の、音影冥冥たるをや。丘壟に彷徨し、墳塋に徙倚す。

この哀辞は藩岳の代筆作である。沢蘭は藩岳の妻の妹と

親友任子咸の間に生まれた娘である。文章の前半は生前の子どものおもかげを述べ、後半は死んだ後の親の寂寞と心痛を述べている。その生前の描写の中で、「朝夕顧復、夙夜尽勤」一文の発想は明らかに「古日歌」の「明星の明くる朝は……夕星の 夕になれば……」に通じている。そして、親の歎き悲しみに関する描写「俯覧衾襟、仰訴穹旻」「寢席伏枕、摧心剖肝」は雰囲気的に「古日歌」の結の部分「足すり叫び 伏し仰ぎ 胸打ち歎き」にそっくりである。しかし、憶良は幼な子「古日」を亡くした老夫婦の嘆き悲しみをテーマにし、整然とした「起承転結」の文章構成でより具体性のある「老年喪子」の悲しい事実を吐露したのである。「身体的言葉」や「孤語」の使用は憶良に特徴的であり独自であるが、とりわけ、冥土世界への発展、子どもの魂が鳥に化して現世と冥界を行き来する発想、さらに子どもの生前の様子と死後の状況などに関する描写は、漢魏六朝時代の志怪小説や唐代の漢詩文にその源泉を辿ることができるのである。

おわりに

山上憶良は唯一真正面から「子」を取り上げた万葉歌人である。これは「妻」「妹」「父母」「夫」を表面的に詠む日

本古典文学では極めて稀なことである。たとえ、直接「子」を登場させる防人歌（二十・四四〇⁽¹⁵⁾）があっても、感傷の歌としてその感傷の余韻が「裾に取り付き泣く」の描写を通して婉曲的に表されているのである。

また、憶良の作品における「子」は、大切な家族の一員として「父」「母」「妻」と共に捉えられている。例えば、

憶良らは 今は罷らむ 子泣くらむ それその母も
我を待つらむそ（三・三三七）

或人、父母を敬ふことを知りて侍養を忘れ、妻子を顧みずして脱屣よりも軽みす。（感情を反さしむる歌一首并せて序）

父母を、見れば 貴し 妻子見れば めぐし愛し 世間は かくぞ道理（五・八〇〇）
貧しき人の 父母は 飢ゑ寒ゆらむ 妻子どもは 乞ふ乞ふ泣くらむ（中略）父母は 枕の方に 妻子どもは 足の方に 囲み居て 憂へさまよひ（五・八九二）

などの記述の如く、憶良の意識には「子」は孤立的な存在ではない。父母を尊く思い、妻子を愛しく思う。「世間の蒼生、誰れか子を愛せずあらめや」（「子等を思ふ歌」）は、世

間の「道理」であり、憶良個人の生きた体験による率直な詠嘆でもある。すなわち、憶良の詠嘆の根底においては、妻や子への愛を絶対的に賛美するのではなく、衆生の煩惱としての愛の姿に対して、妻や子への優しく、切なく、愛しみ深い心が動いているのである。「老年喪子」というテーマにした文芸作品「古日歌」は典型化された具体性のある物語である。文章構成及びその表現上には独自性があると共に、漢魏六朝時代や唐代の幼児の夭逝を悼む哀辞、碑文、賦、さらに詩などの漢詩文の蓄積がこの文芸創作の根底にあったことと考えられる。

【注】

- (1) 中西進著『悲しみは憶良に聞け』光文社 二〇〇九年七月 三九頁。
- (2) 森斌著『万葉集歌人大伴家持の表現』(溪水社 二〇一〇年九月)二五〇頁の統計表「誰との悲別か」による。
- (3) 歌の引用は、伊藤博校注『万葉集』(角川書店 昭和六十年三月)による。以下同じ。
- (4) 中西進著『万葉論集 第八卷 山上憶良』講談社 一九九六年一月 四八一頁。
- (5) 伊藤博著『万葉集釋注 三』集英社 一九九六年五月 二五八頁。
- (6) 高木市之助著『貧窮問答歌の論』(「孤語」部分) 岩波書店 一九四七年。
- (7) 窪田空穂著『萬葉集評釋 第五卷』東京堂 昭和二十五年七月 一九六頁。
- (8) 井村哲夫著『萬葉集全注 卷第五』有斐閣 昭和五十九年六月 二五五頁。
- (9) 注5に同じ。二六六頁。
- (10) 注7に同じ。一九六頁。
- (11) 前野直彬ほか訳「幽明録・遊仙篇他」東洋文庫43 平凡社 一九六五年五月 六六頁。
- (12) 注11に同じ。一〇四頁。
- (13) 今村与志雄訳注『西陽雜俎2』東洋文庫389 平凡社 一九八〇年十一月 二八六頁。
- (14) この部分は、後藤秋正氏が著した『中国中世の哀傷文学』(『唐代の哀傷文学』を大いに参考にさせていただいている。卷二十・四四〇一番歌、「韓衣 裾に取り付き 泣く子らを置きてぞ来ぬや 母なしにして」。(上海同済大学副教授)